

★ 特別企画：次世代を担う若手人材の育成 ★

インタビュー

国際大会でみえてきた 左官の未来と日本の課題

ものづくり大学 技能工芸学部建設学科 三原 斉 教授に聞く

高齢化が進む左官工事業界では、なんとか若い職人に技術伝承と仕事の魅力を伝える取り組みがなされている。そうした中、技能五輪全国大会や技能五輪世界大会といった若手職人が目標に向かって歩んでいくための事業も業界では進められてきた。

本稿では技能五輪の運営などにも携わっているものづくり大学の三原斉教授に若手人材育成における技能五輪の意義についてお話を伺った。 (編集部)



▲「内装工事一式を請け負うのが世界の潮流、大きな転換が図れるか、今の左官の頑張りどころです」と語る三原先生

内外装工事のすべてをこなす世界の潮流

—— 昨年の技能五輪国際大会を通じて感じたことはなんでしょう

最も感じたことは、日本の左官の仕事とは全く異なる作業をしなくてはならないという現実です。

詳しい内容については日左連誌に報告として執筆しましたが、日本の左官の仕事は塗り壁が主体であるものの、『Plastering and Drywall Systems』は、軽量鉄骨＋ボード張り＋パテしごき＋石膏装飾＋テクスチャ仕上げ＋自由仕上げを行い、内外装すべての作業が含まれています。今後、世界の潮流に押されて日本の建設業においても内外装全般を行う仕事が必要になってきた場合、国際大会での課題に取り組むことは仕事の幅の広がりや、プロジェクトの可能性を大きく捉えることができるものと考えます。それだけの考えと企業体力が現代の日本の左官工事業にあるのかどうかをしっかりと議論することが今後の課題となります。ただ、現実的な話として、今の左官工事業社が軽量鉄骨を組んで、ボード張りをを行い、パテしごきをするなどあり得ない。

技能五輪国際大会にチャレンジするのは良いのだけれど、左官仕事とは全く異なる作業をする必要がある。すでに日本の左官仕事ではないことを考えると、これまでと同じように左官工事業種として参加することは無理があると感じています。

—— それまでの国際大会はどのようなものでしたか

これまでの課題は、日本の技能五輪全国大会で行われていたような石膏の置き引きや塗り壁が課題の主流でした。ところが欧米諸国では、そうした左官工事だけでは仕事が成り立たなくなっていて、内外装工事のすべてを引き受けるという潮流になっています。日本は世界的な潮流から外れていると言えます。先ほども述べたように、国際大会の課題は軽量鉄骨やボード張り、パテしごきが主であり、自由課題についても左官の仕事とは全く異なるデコレーティング職種が行う作業になっています。日本の左官といえば壁を塗る仕事が本来の姿ですが、国際大会の課題は乾式工法が主であり、湿式工法が主の左官仕事はほとんどありません。課題内容の仕事で最も近いのは、日本でいえば全室協の会